知って得する
子育て小事典

第８号

光の泉幼稚園
園長高島哲男

子供の世界、大人の世界

大人が住んでいる世界と子供が住んでいる世界は違います。子供は成長の途上ですから、成長が終わった大人とは違う経験をしなければなりません。

子供は成長していくために生活経験の中で物事を判断するための沢山の物差しを取り込んでいかなければなりません。外の世界と関わって良い結果になることも悪い結果になることもどちらもやってみて多くのことをインプットしていく世界に住んでいます。そのことを私は**『子供は図形の世界に住んでいる』と言っています。**それに対して大人はどうやればうまくいくか答えを知っている世界、約束により決まった行動をする世界に住んでいます。それを**『大人は記号の世界に住んでいる』と言っています。**

道路に50という数字が書いてあると、ここは時速50キロメートル以下で走らなければならないという約束事を表しています。そして一つの記号によって皆が同じ行動を取る約束を表しています。一つの記号で皆が同じ行動を取るから安心して暮らせます。「おはようございます」と挨拶されたら「おはようございます」と挨拶を返すのが普通です。

しかし、子供に「おはよう」と言ったら、必ずしも「おはよう」と言う挨拶が返ってくるとは限りません。ニヤッと笑ったり、白目をむいたり、あかんべえやお尻をぽんと叩いて逃げていったりすることも、その子なりの挨拶なのです。

大人は皆同じ事をするのに対して、子供は色々なことをしながら模索していきます。同じ事をしないのは、いろいろなケースの経験をして判断基準を自己の中に確立していく時だからです。

例えば物を持ち上げる場合、ひょいと片手で持てるのか、腰を割って両手で力をいれて持ち上げなければならないものなのか、また、小川を飛び越える場合には、その幅によって立ち幅跳びでいいのか、助走をしなければならないのか目測する物差しを身につける時期だということです。

この時期に失敗する事も経験させずに、大人がすでに知りえた良い結果だけを画一的に教え込んでしまうと、子供自身が自分で判断する物差しを持つチャンスを失ってしまうことになるのです。

長さや、重さに限らず、人の気持ちを汲み取る物差しも子供時代に身につけていきます。それは子供同士が群れになって遊びあう中で自然に身につけることです。喧嘩などはとてもよい経験となりますが、大人が勝手にけんかの原因を探し、良い、悪いの裁きをしてしまっては、相手の気持ちを汲んだり、喧嘩を収めるすべが身につきません。

また、幼児期が図形の世界であることは、人間という動物の特徴、及び発達の観点から見ても理解できることだと思います。

人間は『目の動物』と言われています。それは、思考力を働かせて判断し、行動に移すための基礎となる入力情報の80パーセントが目から入ってくる情報だからです。

その第一歩が母親の顔を覚えることです。やがて母親の胸を離れ、少しずつ活動の範囲を広げていき、興味のあるものを探索し始めたときに何か不安に陥ったときや、自分の身の安全を脅かすことに遭遇した場合、真っ先に母親の懐へ飛び込んでいけるようにするためです。自分の命を守るためには母親と他人の区別がつかなければなりません。その区別がついた証が『人見知り』です。

人間の顔は丸や三角などの単純な形と違って複雑ですので、識別するのはかなり高度な能力が必要です。それは、私たちが外国人の顔を識別するのが難しい事からもわかると思います。

たとえ高度な能力であっても、それを身につけていくことが生きることにとって大事だから、まだ親から保護されている幼児期に身につけるように成長のメカニズムが決まっているのです。

記号の世界はマニュアル化の世界でもあり、そして完璧主義の世界です。初めからその世界で育った子は自分に自信がなく、自立して行くときに精神的不安から問題行動を起すことがあります。不安神経症や強迫神経症になる場合もあります。その子が大人になるともっと深刻です。

以前、NHKの番組で幼児虐待を扱った物を見ました。あるお母さんが我が子を虐待してしまった後に反省の念にかられているのですが、そこで言っていることは「子供はいろんな事をするのでどうしたら良いか分からない。マニュアルさえあれば虐待しなくてすむのに」というものでした。

子供は元来、自分の興味を感じた物に対して積極的に働きかけます。図形の世界に住んでいるということは何をするか分からないのが当たり前なのです。

また、外見上同じ行動であっても、その時の心は千差万別ですから、マニュアルなど作れるはずがないのです。前後の状況や、周囲の状況によって汲み取る以外にありません。子供のときに大勢の仲間で遊んだ経験が少なく、親や教師から押し付けられた記号の世界で過ごして来たことが多かったのだろうと思います。